



移りゆく香港ドル

英国植民地としての歴史を持つ香港では、1997年の中国返還後も一国二制度の下で、独自の香港ドルが用いられています。紙幣は民間銀行3行（香港上海銀行、スタンダード・チャータード銀行、中国銀行）が発行しているため、同じ額面でも3つの異なる図柄の紙幣が流通し、旅行者の目を楽しませます。

民間銀行による香港ドル紙幣の発行開始は1860年代にさかのぼりますが、1935年に法定通貨としての認定を受けて幅広く流通するようになり、現在に至っています（戦時中は中断）。この間、74年のマーカントイル銀行撤退、94年の中国銀行参入など、発券銀行の顔触れも少しずつ変わっています。

ところで、最近、シンガポールの政府系投資会社がスタンダード・チャータード銀行の株式を買い進み、話題になっています。香港の規制により、外国政府等の持ち株比率が20%を超えた銀行は紙幣の発行が認められなくなるのですが、既にその近辺に達しており、同行の香港ドル紙幣発行の長い歴史に幕が引かれる可能性が出てきました。

また、中国の人民元の存在感の高まりが、香港ドルそのものの将来に影を落としています。人民元は05年夏から上がり始め、07年初には1人民元の価値が1香港ドルの価値を上回るようになりました。従来、香港の隣の広東省では香港ドルが人民元と1対1で通用していたのですが、その頃から香港ドルの受け取りを拒否する商店が増えるようになりました。一方、香港では人民元での支払いを歓迎する商店が急増し、今ではお釣りの中に中国の一元貨幣が混ざることもしばしばあります。さらに最近では、香港ドル金利の急低下もあり、香港ドル預金から人民元預金に切り替える香港人が急増しています。

中国との一体化が進む中で、香港ドルが今後どのような変貌を遂げていくのか、興味が尽きません。

（日本銀行香港事務所）



3種類の20香港ドル紙幣
（香港印鈔有限公司HPから転載）



香港で目立ち始めた人民元の両替商